

カンボジア・ベトナム・香港そして日本

一 栃木県経済同友会国際問題部会アジア委員会ベトナム・カンボジア経済視察団に参加して一

開倫塾

塾長 林 明夫

I

国もひとつの生き物であるため、健康なときもあれば、生死をさまようときもある。どうすれば現在よりよい状況をつくり出すことができるかは、そこに住む国民の「自己管理能力」「自助努力」が大半を占めるが、重病や生き死にの場合には、優秀なお医者さんやよく効く薬が必要となる。

カンボジアは生死の境をさまよって、いくらか生きる可能性を見出しつつある超重症患者。ベトナムは、病院から退院間際の回復しつつある入院患者。香港は、こわいのは雷おやじだけで、やり放題のガキ大将。日本はバリバリ働いて一家の大半の収入をかせぎ出している 40 才に突入寸前の元気でまじめなお父さん。

3月6日に宇都宮を出てから宇都宮へ帰るまでの8日間という短い間であったが、カンボジア・ベトナム・香港・日本と4つの国を、主に経済発展の観点から見て、おおよそ上記のように感じた。

II

「開発経済学」の教科書を読むと、非常に参考になることが書いてある。

「後発途上国が食糧増産に最優先順位を置いて、国際機関から農業インフラ整備の支援を仰ぎ、まず食糧輸入を抑制する。そうすれば、1次産品輸出額の伸縮に応じて、輸入を弾力化できる。食糧輸入がふえれば、輸入が硬直化して経常収支の構造的赤字をつくり出す。

後発途上国が食糧増産に成功したならば、次のステップは、農産物の加工である。落花生油、綿実油、石鹼製造、綿紡織といった簡単な加工段階への進出は、技術習得と雇用吸収の効果が大きい。

後発途上国が1次産品輸出と並んで、農産物加工品の生産と輸出とに成功すれば、次に公共事業投資を通じて工業インフラを整備する。道路、水道、電気、通信整備等を建設すれば、外資が進をもたらすばかりでなく、後発途上国の工業構造を高度化するのに寄与できる。

後発途上国がこうした工業化の手順を厳格に順守してこそ、NIESへ接近できる展望を持つことができるのである。

後発途上国が独立後30年の間に犯した過誤と失敗とを学習効果として活用していくなれば、その過誤と失敗の代償も決して高くはない。」

*以上、梅津和朗編著「新開発経済学」

晃洋書房・1993年6月10日刊 P218～219より引用。

何をもって「過誤と失敗」というのかについては大いに議論の余地はあるかと思うが、これを「様々な体験」と言い直せば、梅津氏の指摘は大方うなずける。

「ある意味では、アジアほど政治と経済の結びつきの強かつ固い地域は、世界中存在しないとい
ってよい。その理由は、端的に言ってアジアはまだ発展途上にある国々で構成されており、その中に
ただ一国、世界の経済を支える柱にまで成長した経済大国日本が交じっているという一種のモザイク
がアジアの情勢の特徴だからである。

発展途上にある国々においては、なによりも経済の成長、発展に決意的に影響するものとして政治
を挙げなければならない。筆者はかねてから、発展途上国が「離陸」して先進工業国に仲間入りするた
めの条件として①農地改革、②教育の普及、③民族的対立の克服、④政治の安定である。この経済成
長あるいは4つの「離陸」の前提条件のどれをとってもすべて政治そのものがからんでいることはいう
までもない。率直な表現を使えば、この4つの「前提条件」を満足できない国は、どのように国土が広
く、人口が多く、豊富な天然資源に恵まれているとしても、先進工業国と肩をならべる経済的な発展、
あるいは成長を実現することは不可能といわなければならない。」

*以上、ジュリアン・クイス著「アジアの世紀」-環太平洋経済圏の可能性を探る-ダイヤモンド社
1992年8月刊の「解説・冷戦後のアジア経済をめぐって」長谷川慶太郎執筆部分(P386～387)よ
り引用。

カンボジアが、ベトナムが、香港が、そして我が祖国日本がどのような歴史を経て現在の状況に立
ち至ったか、非常に重要な問題だが、これまでの固有の歴史を正確に認識しながら、各々の国家のあ
るべき姿の実現にむけてゼロからの出発をすべきではないかと、今回短い旅行を通じて痛切に感じた。
あるべき姿はどのようなものかは各国民の意思の一致で決めるべきものかも知れないが、どうしよ
うもない極度の貧困状況にあるカンボジア、社会主義をかかげながら、市場経済を目指すため市場経済
実現するのに必要なものがほとんど未整備のベトナムには、開発経済学者や国際エコノミストたちの
指摘がそのままあてはまるように思われる。

III

ただ、次のような視点から国の発展を考えることも必要と考える。

「内発的発展とは、目標において人類共通であり、目標達成への経路と、その目標を実現するであ
ろう社会のモデルについては、多様性に豊む社会変化の過程である。共通目標とは、地球上のすべて
の人々および集団が、衣・食・住・医療の基本的必要を充足し、それぞれの個人の間としての可能
性を十分に発現できる条件を創り出すことである。それは、現在の国内および国際間の格差を生み出
す構造を人々が協力して変革することを意味する。

そこへ至る経路と、目標を実現する社会の姿と、人々の暮らしの流儀とは、それぞれの地域の人々の
集団が、固有の自然的生態系に適合し、文化遺産(伝統)にもとづいて、外来の知識・技術・制度など
を照合しつつ、自律的に創出する。地球的規模で内発的発展が展開されれば、それは多系的発展とな
る。そして、先発後発を問わず対等に、相互に手本交換をすることができる。」

*以上、鶴見和子・川田侃編「内発的発展論」東京大学出版会 1989年3月刊第2章「内発的発展論
の系譜」鶴見和子執筆部分(P49～50)より引用。

そうは言っても、アンコール・ワットやアンコールトムの入口近くの土地が、将来の観光施設用にと、
タイの人々によってほとんど買い占められたとか、アンコールワットを見にいったらどこからと

もなく大量の少年少女たちが出現し、Can you speak English?と話しかけ説明をし、懸命に観光客の手を引き歩行を助け、いい子たちだとおもっていたら、すかさず One Doller(1ドル)、One Doller(1ドル)と何人もが口走る。外では足をなくしたり 1日1ドルもかせげない人々がたくさんいるのに、入ってみればアジアの中にこれ以上はないと思われような、いつも不在の王様のためのきらびやかな王宮などをみると、「内発展発展論」もあるべき姿としてはよいが、とても現実はそのレベルでないような気がする。

一人ひとりの人たちが平穏無事に暮せる状況をつくり出すことがどれだけたいへんであり、また大切であるか、非常に考えさせられた8日間であった。

IV

「どなたか中古でもいいから消防自動車を一台寄附してはくださらないでしょうかねえ。プノンペンにはまともなのがなくて、火事がおこると自然に消えるのをまつしかないのですよ」「物なんかできるわけがない。組立工場も、部品工場も、いもの工場もすべてない。第一ものをつくることのできる20代以上の人がほとんどいないのだから。」「この国の人は全く気力がない。国連、とくにその中で6割もお金をだしてくれる日本人を頼りの綱にしている。」—カンボジアできいたことば—